

埼玉の夜明け

第46巻
第1号
通算142号

日本キリスト教団
関東地区委員会
社会委員

第45回信教の自由と平和を求める二・一一集会

悪と愛にこころ

聖学院大学学長 姜尚中

今日は冒頭に本間先生に日本基督教団の罪責告白について話をお聞きし、また最上先生の感動的なお話を拝見いたしました。

北一輝の『日本改造法案大綱』を一晚で自ら書き写し、それを生涯の自分の糧としたのは他ならぬ安倍首相の祖父である岸信介氏であります。彼は商工省官僚としてまた満州国の影の総理として、東条英機の総力戦体制立案をはかり、敗戦後はA戦犯容疑で巣鴨で過ごし、GHQのもとでリリースされ、石橋湛山首相のもと財務大臣を在職し、内閣委総理大臣となり、日米安保改定の立役者となり、池田内閣の所得倍増計画の礎を築いた人物であります。

また満州国で高木正雄の名前で満州において天皇の軍人として活躍した人物が現在の韓国朴大統領の父の朴正熙です。彼は岸氏と戦後解放後烈頭の友となり日韓関係をアレンジする立役者となりました。

戦後日本の安全保障と高度成長の礎は、満州国の影の総理と呼ばれた「昭和の妖怪」と、韓国の漢江の奇跡を作った「独裁者」によって作られ、二人が日韓の最高のリーダーとなりました。今日の説教で「すべてのわざには時がある」との言葉がありました。歴史の中で戦後七〇年のメッセージがどのように発せられるのか、アジアをはじめ世界各国が注目しています。願わくは、今日の罪責告白

の一部でも戦後七〇年のメッセージに盛り込まれ、日本国民の総意となり、かつての恩讐を超えて新しい時代に世界に向かって発せられることを期待していますが、現実にはその反対の方へと向かう可能性が濃厚です。

「罪責告白」は悔い改めと和解のメッセージであります。人々の心を動かし、凍りついた各国との関係を溶かしていく大きな力であると思います。

戦後七〇年、日本の歴史と私たちを取りまく環境を考えると残念ながら、戦後責任はまだ達成されていないとは思いますが、戦後という時代で歴史を区分している国はイタリアにも・ドイツにもない。平和憲法がこれから一〇〇年、一〇〇〇年存続する限り、戦後という時代区分は生き続けるでしょう。しかし、この憲法がなくなった時、戦後は終わるのです。あの戦争の惨禍を心に刻み語り、憲法の理念の実現に邁進することは、これからももう七〇年、そしてさらに七〇年と続いて行かなければなりません。

説教にありました「非国民」という言葉は恐ろしく、耳をふさぎたい言葉です。なぜこのようは状況が生まれるのか。河上肇が喝破したように、日本には一つの確固たる宗教があり、それは国家教です。戦前であれば、国体は真善美を体現し、皇軍はその化身となって行動をする。皇軍は決して過ちを犯すことなく、無謬の存在であるという確信を多くの兵士に植え付けアジアへの侵略戦争へ駆り立てたのです。すなわち国家はこの世の中の最高の価値の具現体に他なりませんのでした。

本来国家は中性であり、人が何を信じて何を信じないかという個人の内面に介入してはならず、これを達成するために先人たちは多大の血を流しました。「信教の自由」とは近代国家が中性国家になることで初めて実現されるはずですが、之からは再び、国家が学校の教科を通じて道徳を子供たちに注入しようとしています。

漱石は学習院の講演で国家の道徳は個人の道徳と比べていかにも浅ましく、国家は嘘をつくこと述べ、それに対して個人の道徳は国家の道徳よりはるかに高いと断言しています。

ところで、かつてアメリカ映画に「ブラジルから来た少年」という、スリラー仕立ての問題作がありました。映画は、ヒットラーのDNAを隠し待つドイツの医学者がブラジルでそのクローンを再生し、少年達に植え付け世界中にばらまきもう一度第三帝国を築こうとするが、このたぐらみは失敗するという背筋の寒くなる物語です。

もし、歴史教育が、目に見えない、戦前のDNAを子供たちに植え付けることになるならば、戦責告白やアジアとの関係の意味は大きく変えられ、ゆがんだ歴史観が増えるかのように考える若者が増えてくるのではと思う。歴史の改造は戦後七〇年を契機に行われるかもしれない。

八月一五日、戦前の国家体制は崩壊したと思われましたが、朝鮮戦争をキッカケに「逆コース」が進み、軍閥や内務省の官僚エリートはパージされたものの、経済官僚をはじめ、官僚制の中核部は生き残り、官僚による統制が進むとともに、経済成長を遂げました。福島原発があのような事態になりながら誰一人として責任を問われ辞任することなく、官民を挙げて今原発再稼働へと向かっています

が、そこには戦後と同じ様な構造が垣間みられるような気がしてなりません。

終戦は、なぜ八月一日でなく、ではならなかったのでしょうか。ソ連参戦を軍首脳は知っていたが、戦争をやめず、広島・長崎の原爆の悲劇が起りました。

国や政府を批判する者は非国民とみなされ、「物言えは唇さびし」の空気が我々を取り巻いている。

憲法は制度の「宗教の自由」は保障しているが、あたかもそれが不在かのような実態があり、「悪」について考えざるをえません。

ルカによる福音書第八章三十一―三六節が語る悪は、今も世に生きているように思えてなりません。

悪はある意味で、陳腐であり、空虚です。しかし、ナチスドイツのスローガンは空虚であるにもかかわらず、生きる目的を見失った人々を熱狂させました。

グローバル経済の世界では利潤が最高の価値であり、格差と貧困がこれほどにまで捻じ曲げた時代はないかもしれない。その中で多くの若者が傷つき、生きる目的を失い、その空虚さを埋めるためにテロが起っている。

極東裁判で「国体」とはなにか？問われたが誰一人として答え

られず、国体がいかに空虚なものを彼らは知っていた。この空虚なものが多いの国民の命を奪い、アジアであればどの惨事を招いたのである。

悪は空虚であるがゆえに暴力的で、この地上のすべての価値を独占しているかのように振る舞っている。その空虚さを満たすのは神の愛であり、イエスキリストの愛に他ならない。

宗教の自由は人間にとって重要な基本である。聖書は愛を語り、愛なくして信仰はなり立ちえず、国家は成り立たない。戦後、キリスト教の愛は福祉という形で実現しようとした。いま私たちは隣人にもあまりにも冷淡であり、四年前の大震災がなかったかのように、東京五輪のミニバブルのただ中にある。被災者の「私たちを見捨てないでほしい」との叫びがあるが現実には忘れられている。

日本と朝鮮半島との和解が私の終世の願いです。朝鮮戦争を通じて戦後民主主義は逆コースを歩んだ。日韓条約五〇年の日に。いかに国と国が和解し、イエスの愛によって結びつくことができるのか。周りの空虚さを抱えた人に対してどのように向き合っているのかが問われている。国家は空虚

憲法九条と二五条に基づく 新しい国を求めて

国際基督教大学客員教授
(所沢みくに教会信徒) 稲 正樹

さる一月末に急逝された憲法研究者の奥平康弘氏は、「日本国憲法が、現代の混迷に満ちたアジア・世界のありようにある種独特な役割を果たしうること」を検証しようではないか」という言葉を遺された。それは千葉真氏の言う、「未完の憲法革命²⁾」を世代を超えた

プロジェクトとして進めていく課題である。いま、軍事大国とグローバル競争国家をめざして暴走する安倍政権によって、解釈改憲と明文改憲が極限まで追求され、平和憲法が破棄されようとしている。

昨年七月の集団的自衛権の行使容認に関する内閣による憲法解釈の変更は、国民の憲法改正権を奪する立憲主義の破壊であった。

いま国会が戦争法案を審議しようとしているが、それは国民の憲法改正権の奪奪という問題点に類被りしたままで、内閣の憲法破壊行為を追認することを意味する。国会のなすべきことは、戦争法案に対する審議の開始ではなく、国会のブラックホール化から撤退し、国民代表機関としての基本的な立場に立ち戻ることである。

この原稿は、社会委員井上雅雄兄が録音・原稿起こしをしたものです。ありがとうございます。

いま国会で審議されようとしている法案は、戦争法案としての本質に「平和安全法制」というレッテルを貼っている。自衛隊の海外派兵恒久法を「国際平和支援法」

という名称で制定し、同時に、自衛隊法、PKO法、周辺事態法、船舶検査法、事態対処法、米軍行動関連措置法などあわせて一〇本の改正法案を「平和安全事態整備法」と称して、その成立を目指している。その手法は一つの鍋に計一一の法案をぶち込み、一括して審議するという無法ぶりである。さらに政府自体説明に苦慮している、「新・定義」が乱立している（いわく、「存立危機事態」「重要影響事態」「武力攻撃事態」「国際平和共同対処事態」「グレーゾーン事態」）。いつでもどこでも切れ目なく戦争を行う国へと、この国を変えてしまおう戦争法制は許さずはならない。行くべきは平和の道である。

安倍政権支持をたらしている要因は、国民的対案の欠如である。以下のような、新しい平和国家と福祉国家の提案がすでになされており、真剣な国民的討論が必要である。

(1)日本は集団的自衛権行使、自衛隊の海外派兵を拒否し、憲法九条に基づいた外交を行う旨を改めて宣言する。

(2)日本は、改めて、日本帝国主義の植民地支配、侵略戦争、それにもなうアジア諸国民への殺戮、

「慰安婦」制度など人権の侵害の責任を認め、政府の責任で包括的な調査を行い、謝罪を行う。

(3)頻発する北東アジアの領土紛争に関しては、いかなる場合においても武力行使を行わず外交のテーブルで解決を模索する。

進んで、北東アジアの平和保障の対抗構想を具体化し、憲法九条を實現していくことが必要である。

(4)北東アジアでの紛争の武力行使の禁止、核、通常軍備制限に並行し、憲法九条をもつ日本は、安保条約の友好条約への変更、米軍基地の撤去を行う。

(5)自衛隊の縮小、解体、災害救助・復興支援隊の改組・拡充が、他国の軍縮と並行しながらも一歩先んじて行われるべきである。

(6)さらに、北東アジアの平和を安定させるには、各国の軍備拡大、軍事化の背景となり動因でもあるグローバル経済、グローバル企業の規制が不可欠である。

いまこそ、国民的規模で九条の生きるアジアと日本の構想を論議し具体化し、その担い手となる政府をつくる必要がある。

※注

1 奥平康弘「はじめに—平和主義を勝ち抜こう—」奥平康弘・山

口二郎(編)『集团的自衛権の何が問題か—解釈改憲批判』岩波書店、二〇一四年。

2 千葉真『未完の憲法革命』としての平和憲法』岩波書店、二〇〇九年。

3 高見勝利「集团的自衛権行使容認論の非理非道—従来の政府見解との関連で—」世界八八三号(二〇一四年二月号)一七七頁以下。

4 講演後に接した、『戦争法案』を葬ろう6・4院内集会』における前田哲男の報告。

5 自由法曹団「戦争法制を批判する—いつでもどこでも切れ目なく戦争へ—」二〇一五年四月三〇日。 http://www.jiaf.jp/menu/pdf/2015/150501_01.pdf

6 渡辺治「安倍政権とは何か」渡辺治・岡田知弘・後藤道夫・二宮厚美(著)『〈大国への執念〉安倍政権と日本の危機』大月書店、二〇一四年、一五二—一六五頁所収。

この原稿は、五月三日(日)に所沢みくに教会で行われた「憲法記念日講演会」での講演要旨です。稲先生が「埼玉の夜明け」用に改めて書いてくださいました。ありがとうございます

した。なお、当日の出席者は四名で地域の方々も多く参加され、熱心な質疑応答があったとのことでした。

二〇一五年度

社会委員会方針

社会委員長 清水与志雄



信仰生活と社会活動は本来は一つの事柄を別様の観点から表現しているにすぎません。

人がふたりに以上存在する処には既に「社会」が存在するからです。

対他的関係において、神は人に愛すべしとの命令をされています。神は人を創造し、愛したもうがゆえに、人は存在へと呼び出された。神と人との関係性において私たちは、現に「社会的存在」なのであります。ゆえに信仰とは即社会的事件と言わねばなりません。如上の観点から、それぞれの教会生活において基督教社会倫理

の実践(即信仰証言)を志していただきたいと祈念いたします。

地区社会委員会として、今年度は以下の啓発活動を企画検討しているところです。これら協同の学びを有効に活用していただきたく希望いたします。

- ①環境問題六月二十八日(日) 埼玉和光教会 講師片岡輝美氏(若松栄町教会)
- ②八・一五集会八月十五日(土) 埼玉和光教会 講師最上光弘師(所沢みくに教会)「罪責告白」
- ③信教の自由と平和を求める二・一一集会 詳細未定
- ④関東教会社会活動協議会九月一日〜四日「柏崎原発を考える(案)」柏崎教会
- 以下の詳細は未定です。
- ⑤沖繩キリスト教団との合同の捉え直し問題と辺野古基地移設問題
- ⑥靖国問題(平和と天皇制問題)
- ⑦戦争法案問題
- ⑧憲法改悪問題
- ⑨部落差別問題
- ⑩ヘイトスピーチ問題

活動委員会学習会

知っていますか、「靖国神社」

講師 井川明 (川口教会)

聖書には「平和」という御言葉が数多く捧げられている。私は、キリスト者として「靖国神社」について学ぶこととした。

靖国神社の起源は、幕末の動乱で没した志士の霊を弔うために数多く作られた墓「招魂場」に端を発し、一八六八年には、幕末の動乱、戊辰戦争の戦没者のために、江戸城広間に神座を設けられたことに由来する。

その後、東京招魂社となり、当初上野に営むことが予定されていたが、その招魂祭が行われた年、彰義隊と官軍の戦い(上野戦争)があり、江戸の総鎮護であった上野・寛末寺は火の海と化し、当時陸軍参与であった木戸孝允は、上野を東京招魂社の地と定めた。

その翌年、陸軍の創始者であり、兵部省初代兵部大輔となった大村益次郎(近代陸軍の創設者)は、上野に対して九段の地を主張、そのまま九段に営むことに決定されたという。大村がなぜ九段

をしたのかといえ、上野は亡魂の地であるから、いっそ之を他に移すも宜しからむ」とい、徳川軍の霊の彷徨う「亡魂の地」であったからである。

靖国神社の歴史は、一八六九年に東京招魂社として創立され、明治天皇が命名された「靖国」(「国を靖(安)んずる」という社号)により、一八七九年六月四日に「靖国神社」と改称され、現在に至っている。その間、一八七四年の「台湾出兵」から海外派兵における戦死者の合祀が行われ、別格官幣社として社格を制定して以来、近代日本国家が行ったあらゆる戦争にかかわっている。

現在の靖国神社は、「戦役事変別合祀祭神」と称して、明治維新、戊辰戦争、西南戦争から大東亜戦争までの二、四六六千余柱の神霊が「靖国の大神」として祀られている。しかし、靖国神社の「祭神」には、明治初頭の「内戦」における賊軍及び一般民間人と外人戦死者は祀られていない。

靖国神社は、一九四六年(昭和二十一年)に、日本政府の管理を離れて東京都知事の認証により、宗教学法人法の単立宗教法人となった。単立宗教法人(単立神社)であるために、神社本庁との包括関

係には属していない神社である。

このような中で、靖国神社の顕彰の言葉をあげて考えてみたい。

「お天子様」「御盾」「護国の神」「聖戦」「英霊」「忠霊」「招魂」「護国の英霊」「靖国の妻」「靖国の母」「武運長久」「忠勇義烈」へとエスカレートし、国民の精神を麻痺させる構造を持っている。それは、社会的な状況と「遺族感情」や「現代社会の自己的孤独構造」が合体したとき、思わぬ現実が到来することを忘れてはならない。

このように、戦争で、死んでいった国内外の戦役者を、あたかも「英霊」として敬い、美化することは、「遺族感情」を無視し、戦争を聖戦とする「聖戦史観」を創出し、歴史認識を国際的な反省としてではなく、「涙」に導くことにより、悲しみから喜びへ、まるで「錬金術」によるかのよう、「遺族感情」が一八〇度逆のものに変わってしまう構造になる施設であり、信教の自由からかけ離れた、「靖国の呪縛」の世界へ導くものと考えられる。

最後に、閣議決定された「集団的自衛権」と「靖国」の問題は、非武装中立を中心におき、専守防衛を続けてきた我が国の精神を、

戦争国家にする考えであり、日米同盟を強化し、唯一、米国に主張できた憲法第九条を、他国領域での武力行使を許すものに歪めるものであることを、私たちは忘れてはならない。そして、構造的には戦死者が発生した場合、戦死者は殉死者となり、殉死者は犠牲者となる構造を明確にしておく必要がある。戦後、日本の自衛隊は、他国と戦ったことがないのである。



第一七回平和を求める

八・一五集会案内

日時・八月一五(土) 一〇時
会場・埼玉和光教会
講師・最上 光宏牧師
演題・「罪責告白」

教会乗っ取り 工作に注意せよ!

行田教会牧師 清水与志雄

結論から言おう。神の恵みの教説を徹底して信ずるとき、救いを伝達する出来事は神の行為の元で起こる。人は、純粹な意味で、神ご自身の「拔擢」という啓示事件によって「土の器」として用いられるにすぎない。それゆえ、われらに出来る最良の祈りは「聖霊よ、来て下さい」と祈るほかはない。

今、日本の教会は統一協会をはるかにしのぐ破壊力をもつカルト教団の脅威に、無防備のまま晒されている。「既成教会乗っ取り教団」新天地(新天地イエス教証しの幕屋聖殿)の「伝道工作」の脅威に晒されているのである。

韓国には、自らを再臨のメシアと自称する者が五〇人を越す。このような「異端」「類似」教団はプロテスタント系人口の二五%を占める。その社会的影響力は既に強大である。日本でも、乗っ取られた教会が各地で出ているとの情報伝えられている。

教会乗っ取り工作は無論、秘密裡に行われる。先ずは、徹底した情報収集がなされ、分析・戦略会

議が数年にもわたり継続される。工作員は「忠実な模範的信徒」との評価が固まるまで徹底して正体を隠し、優秀な「伝道者」として「求道者」(工作員)を教会内に増やす。偽装洗礼も厭わない。最終的には役員多数を獲得する。

総会で牧師解任・財産処分まで合法的に遂行する。勢力拡張路線を組織的に展開する方法はシステム化され、工作員への訓練は軍隊のように熾烈を極める。教祖への忠誠心は徹底的にたたき込まれている。「新天地」が狙っているのは教会外の一般人ではない。基督教会の「信徒」である。教会の将来はどうなってしまうのか。注意喚起!

編集後記

安倍政権は日本の国会論議以前のアメリカ議会での演説・約束、国民の平和や原発問題にも全然耳を傾けないことなど国会や国民軽視で正に専制的だ。民主政治には程遠い感じがする。

今回は掲載記事が多目になりましたので社会委員会報告は次回に行います。(浅子)